

日蓮大聖人御書全集

ほうえしよ

法衣書

新版
1347
ゝ
1348

ほうえしよ
法衣書

こうあん ねん
弘安3年(80) * とき
富木家

おんころもぬの ひとえぬの た そうら お
御衣布ならびに単衣布、給び候い了わんぬ。

じき いのち 続 ころも み 隠 じき うじよう
そもそも、食は命をつぎ、衣は身をかくす。食を有情に

ほどこ 者 ちようじゆ ほう 招 ひと じき うば たんめい
施すものは長寿の報をまねき、人の食を奪うものは短命

ほう 受 ころも ひと 施 もの せぜ しょう
の報をうく。衣を人にほどこさぬ者は、世々、生ずると

らぎよう ほう 感 ろくどう なか にんどう いげ みな かたち
ころに裸形の報をかんず。六道の中に、人道已下は皆、形

はだか う てん ずいしようえ なか しかとう むえ
裸にして生まる。天は随生衣なり。その中の鹿等は、無衣

う ひと ころも 盗 み かわ
にして生まるのみならず、人の衣をぬすみしゆえに身の皮

ひと 剥

ぬす

ころも

償

報

得

ひと

を人にはがれて、盗みし衣をつぐのうほうをえたり。人の

なか

せんびやくびく 尼

しょう

とき

ころも

き

う

中にも、鮮白比丘には、生ぜし時、衣を被て生まれぬ。

ぶつぼう

なか

らぎよう

ほう

ぎよう

どう

ゆえ

しやくそん

仏法の中にも裸形にして法を行ずる道なし。故に、釈尊

まかだいもびくに

ころも

え

しょうかく

成

たま

もろもろ

は摩訶大母比丘尼の衣を得て正覚をなり給いき。諸の

びく

さんえ

許

どんこん

びく

えじき

調

比丘には三衣をゆるされき。鈍根の比丘は、衣食ととのわ

あらかんか

しょう

見

そうろう

ざれば阿羅漢果を証せずとみえて候。

こと

ほけきよう

にゆうわにんにくえ

もう

ころも

ほん

殊に法華経には「柔和忍辱衣」と申して、衣をこそ本と

そうら

ほけきよう

ぎようじや

ころも

おお

たも

みえて候え。また法華経の行者をば衣をもつて覆わせ給

もう

懇

義

うと申すも、ねんごろなるぎなり。

にちれん

むかい

びく

じゃけん

もの

ゆえ

てん

憎

日蓮は、無戒の比丘、邪見の者なり。故に、天これをにく

たま

じき

ころも

乏

み

そうろう

ませ給いて、食・衣ともしき身にて候。しかりといえど

ほけきよう

くち

じゆ

時

々

説

たと

だいじゃ

も、法華経を口に誦し、ときどきこれをとく。譬えば、大蛇

たま

ふく

伊 蘭

梅

檀

しろう

の珠を含み、いらんよりせんだんを生ずるがごとし。

伊 蘭

捨

梅

檀

進

そうろう

じゃぎよう

隠

たま

いらんをすててせんだんまいらせ候。蛇形をかくして珠

さず

奉

を授けたてまつる。

てんだいだしい

たきよう

なん

き

によ

き

天台大師云わく「他経は、ただ男にのみ記して女に記せ

とうんぬん

ほけきよう

によにんじようぶつ

ゆる

ず」等云々。法華経にあらざれば、女人成仏は許されざる

ぐそくせんまんこうそうによらい

もう

ま

かだいびくに

か。具足千万光相如来と申すは、摩訶大比丘尼のとなり。

推量 そうろう によにん じようぶつ ほけきよう

これらもつておしはかり候に、女人の成仏は法華經によ

そうろう かなら まさ しんじつ と

り候べきか。「要ず当に真実を説きたもうべし」は教主

しやくそん きんげん みな しんじつ たほうぶつ しやうみよう ぜつそう

釈尊の金言、「皆これ真実なり」は多宝仏の証明、「舌相

ぼんてん いた しよぶつ せいじよう にちがつ ち お

は梵天に至る」は諸仏の誓状なり。日月、地に落つべしや。

しゆみせん 崩 たいかい しお ぞうげん だいち

須弥山はくずるべしや。大海の潮は増減せざるべしや。大地

ほんぷく

は翻覆すべしや。

おんころも くどく ほけきよう 説 そうろう こころ

この御衣の功德は法華經にとかれて候。ただ心をも

思 遣 たま そうら ことば 述

つておもいやらせ給い候え。言にはのべがたし。